

- 310 【𠂔】 口部 2画 総画 5画 「囚」の異体字か
 〔読み〕 シュウ モウ ひふく ひとや なかし
 〔解説〕 『拾篇目集』に「ヒフク」、『音訓篇立』に「シフ音 マウ音 ヒトヤ ナカシ」とある。『音訓篇立』の注文からすると「囚」の異体字か。
- 311 【𠂕】 口部 4画 総画 7画 漢字
 〔読み〕 イ めぐる かこむ
 〔解説〕 『中華字海』が『篇海類編』を典拠に「音通。策」、日本の『同文通考』を典拠に「音圍。同圍」とする。後者の意味に対する典拠がたまたま見つからなかったのであろうか。日本から伝わった用法とも考えられる。『玉篇略』に「イ メクル カコム」とある。台湾の漢字規格にもある。
- 312 【𠂖】 口部 4画 総画 7画 国字か
 〔読み〕 かざる
 〔解説〕 『世尊寺本字鏡』・『音訓篇立』・『法華三大部難字記』に「カサル」とある。飾る意の国字か。或いは「カケル」の誤りか。
- 313 【𠂗】 口部 4画 総画 7画 国字
 〔読み〕 つく
 〔解説〕 『拾篇目集』に「ツクナリ」とある。
- 314 【𠂘】 口部 5画 総画 8画 漢字
 〔読み〕 コク くに
 〔解説〕 『国字の字典』が「國」の意の国字とする。『同文通考』の省文にある字形は、『簡化字源』が南北朝碑刻からとする字形とほとんど同じである。常用漢字と同じ字形も『簡化字源』が敦煌の変文から引用している。「國」の異体字に関する詳しい研究論文に笹原宏之著『字源説、字源意識、文字に対する意識が字体に与えた影響—「國」の異体字に関して—』がある。この論文でふれられる「國」の異体字は、中国典拠のものが 25 種類、日本典拠のものが 25 種類、重なりを省けば 35 種類で、「國」を含めれば 36 種類が考察の対象とされている。重複するものの一部は、日本典拠のものの方が中国より古いが、ほとんどは中国からもたらされたもので、「国」もそのひとつである。中国では、六朝時代頃までさかのぼれるが、日本では平安時代までということである。全くの漢字であると考えられる。
- 315 【𠂙】 口部 5画 総画 8画 国字か
 〔読み〕 と
 〔解説〕 『法華三大部難字記』に「ト」とある。
- 316 【𠂚】 口部 5画 総画 8画 「囗・國」の異体字
 〔読み〕 くに
 〔解説〕 『世尊寺本字鏡』に「クニ」とある。音は確認できないものの「囗・國」の異体字か。『音訓篇立』に「囗」と中間的な形で「クニ」とある。
- 317 【𠂛】 口部 6画 総画 9画 国字
 〔読み〕 すがる

〔解説〕『篇目次第』に「スカル 无」とある。

318 【回】 口部 6画 総画 9画 国字

〔読み〕 しの

〔解説〕「回影猿七尺(しのかげざるもしちしゃく)」は、弘化3年(1846)初演の浄瑠璃。

319 【困】 口部 7画 総画 10画 「鬪」の異体字

〔読み〕 とじきみ

〔解説〕『世尊寺本字鏡』・『音訓篇立』・『法華三大部難字記』に「トシキミ」とある。「鬪(とじきみ)」の異体字か。「鬪」・「鬪」参照。

320 【𠩺】 口部 7画 総画 10画 誤引用

〔読み〕 「𠩺𠩺」と二字で「ぼんのう」

〔解説〕『国字の字典』が『文教温故』を引き「煩惱(ぼんのう)」の意の国字とする。『文教温故』には、「𠩺𠩺」と「𠩺」二文字に、「シ、煩惱」とあり、「𠩺」と一字にするのは、『国字の字典』の引用誤りである。

321 【𠩺】 口部 7画 総画 10画 「國」の異体字

〔読み〕 くに

〔解説〕『漢字百科大事典』「浄瑠璃外題」に「𠩺言詢音頭(くにことば くどきおんど)天明8年(1788)初出」とある。『江戸版本解読大字典』がやや崩れた字形で『庭訓往来』から「異𠩺」と引用する。音義ともに「国・國」などと同じであり、国字ではない。

322 【𠩺】 口部 8画 総画 11画 国字

〔読み〕 はかりごと

〔解説〕『観智院本類聚名義抄』に「ハカリコト」とある。「𠩺」は、「留」の異体字であるが、「𠩺」も『中華字海』などにはない。

323 【音】 口部 9画 総画 12画 「圍」の異体字か

〔読み〕 アン かわや

〔解説〕『篇目次第』に「廁別切 无」とある。『慶長十五年版倭玉篇』に「アン カワヤ」とあり、『国字の字典』が「圍(かわや)」の意の国字とする。『篇目次第』に「国構えに責」で、「セキ反クサシ 无」とあるなど「圍」の異体字が他にも見られ、これらのひとつにすぎないものとも考えられる。国字とは言えない。

324 【皇】 口部 9画 総画 12画 国字か

〔読み〕 コク くに

〔解説〕戦前、「皇国」の意で作られた文字。宗教団体の名前に残る。笹原宏之著『字源説、字源意識、文字に対する意識が字体に与えた影響』に「戦前、戦中の日本で「國」の代わりに「圍」を用いた例がある。この字体は中国にもそれまでの日本等にも見られない。まず「圍本神教会」という新興宗教があった。1932年に鹿児島で発行された新聞『圍本神教』には、「くに」と傍訓のある箇所があり、コクとも読むようである。次に1938年に熊本の大江義塾の『圍体明徴とは何ぞや』には、傍訓がないがコクという音にも、くにという訓にも用いていることが目録、熟字、文脈からわかる」とある。「圍」は、「國」などと音訓ともに重なる。そのような場合には、国字ではなく異体字とするのが一般的である。ただ、「國・国」などが、国の統治形態にかかわらず使われるのに対し、「圍」は、主権在民の「国(くに)」には使われず、「皇国」の意専用の「くに」であ

る。そこに用法の差を見出し、国字と判断した。

325 【書】 口部 10 画 総画 13 画 漢字

〔読み〕 としょかん

〔解説〕 図書館の意味で 1926 年 7 月に作られた字で、中国人杜定友の作である。このことが、同氏自身によって、昭和初期の雑誌『園研究』に書かれており、同書によると雑誌名『園』などに使われ、日本で普及したため、中国でも日本の字と思われていたことがあるようだ。JIS 補助漢字・JIS 第4水準にあるほか、台湾の漢字規格にもある。『廣漢和辭典』に「図書館の三字を簡単に書いた字。」とある。なお、「園」の国構えの最終画をとった字も「図書館」の意で、同氏が作ったものである。当辞典ネット版協力者、福田雅史氏の「トショカン」という文字」<http://hp.vector.co.jp/authors/VA000964/html/tosho.htm>にも詳しい。なお、「ト・ショ・カン」の三音を表すので、漢字ではないとする説もある。